

紹介

中國四川國際三國文化研討會

——中國における『三國演義』の研究動向——

筆者は一九九一年十一月に、中國四川省成都市において行なわれた「中國四川國際三國文化研討會」に参加した。本稿ではこの研討會について報告し、あわせて最近の中國の『三國演義』の研究動向についても簡単に紹介したい。

「中國四川國際三國文化研討會」が開かれたのは、この九一年が最初である。今後定期的に開かれることになるのかどうかは不明。主催は四川省人民對外友好協會、四川省對外文化交流協會、四川大學、中國『三國演義』學會。會期は學術講演が十一月一日、二日の二日間、その後十一月七日まで「三國文化之旅」があって、四川省の三國關係の遺跡を參觀した。研討會の閉幕式は七日に四川省廣元市で行なわれたので、學術講演と遺跡參觀を合わせて研討會と

稱しているわけだが、本稿では學術講演についてのみ報告し、遺跡參觀についてはまた別の機會に譲ることとする。

研討會の開會式並びに學術講演一日目の會場は成都市人民南路にある岷山飯店の國際會議廳。参加者は内外の研究者、四川省、成都市の幹部、マスコミ關係者、主催の協會關係者等百名をこえる人数であったが、研究者は予想外に少なかった。日本からの参加者は筆者と東京大學大學院生で當時北京大學留學中の上田望氏、朝日新聞社北京支局長横堀克己氏夫妻、日本の民間研究グループ中文會の二十五名、西南交通大學の外國人教師。

學術講演を發表順に紹介していこう。

一日目の午前は、まず上海古籍出版社編集委員で、著名な研究者でもある何滿子氏の「三國史・三國演義」與巴蜀文化」。三國時代の歴史、『三國演義』などと巴蜀、現在の四川の文化との關係について述べ、巴蜀文化が三國の歴史や文化から大きな影響を受けていることを指摘した。

續いて四川大學歴史系教授の繆鉞氏の「研究三國史の重要意義」。三國時代は各分野において後の時代に影響を與

えた。政治面では、尙書・中書・門下の三省制が魏において成立し、唐代に完成した。經濟面ではそれまで黃河流域が中心であったのが、吳・蜀が建つたため長江流域の經濟が飛躍的に發展し、隋唐以後經濟の中心が長江流域に移つた。文學面では五言詩が後漢に起こり建安に隆盛となつた。辭賦では抒情賦が主流となり、駢文は三國期に起こつた。その他の分野においても後の時代に主流となるきつかけが三國期にあることが多い。そのため三國時代を詳細に研究しなければ、それに續く兩晉南北朝・隋・唐の時代を理解することは難しいと強調した。

三人目はアメリカ・ニューヨーク大學教授で、最近『三國演義』を英語で全譯したモス・ロバーツ氏の「孔明誦銅雀臺賦爲甚麼使周瑜那麼激動?」。孔明の「銅雀臺賦」がどうして周瑜を激怒させたかというタイトルそのままの内容で、特に目新しい考え方などは無かつた。

次にイギリス・ロンドン大學講師の盧慶濱氏の「『三國演義』與『資治通鑑綱目』—試論演義體與史學著作」。小説の作者である演義家と史學家の「三國」に對するアプロ

チの仕方は、同じ「義」という概念を持っているものの、演義家は相對的かつ客觀的立場に立ち、史學家は絶對的かつ主觀的立場に立っている。そのことが小説と史論の違いになっていると主張。また、『三國演義』の基礎となる歴史書は『資治通鑑綱目』ではないかと、『三國演義』と『資治通鑑綱目』の類似點をレジューメの最後に擧げている。興味深い點もあつたが、『三國演義』の基礎が『三國志』ではない理由を擧げていないなど不備が目立つた。

續いて映畫『三國志』の監督である孫道臨氏の「我爲甚麼想拍『三國演義』?」。映畫『三國志』は中國映畫としては珍しく日本でも全國公開されたが、評價は散々であつたように思う。その『三國志』を制作した動機を語つたのだが、古くは五、六十年代の名畫『家』『早春二月』に主演、八十年代の『雷雨』では脚本・監督・主演の三役をこなし、日中合作映畫の『未完の對局』でも主演した人氣俳優の孫道臨氏は、この研討會の目玉であつたらしく、聽衆の受けも最高であつた。

午前の最後は湖南師範大學中文系副教授黃鈞氏の「欲與

天公試比高——諸葛亮形象史外部研究淺議」。諸葛亮は天命に逆らつて失敗するが、そのような悲劇的精神は中國民族の文化的心理に根源があり、それは中國古代神話の悲劇的英雄に始まる。特に太陽を追つて力盡きた夸父は『三國演義』の諸葛亮と相似點が多く、諸葛亮のキャラクターの成立に影響を與えている。諸葛亮と同型のキャラクターは『三國演義』以降の各種小説に多く見られるが、その原型は夸父をはじめとする神話の悲劇的英雄にある、という内容である。諸葛亮型のキャラクターの成立を考える場合、『三國志平話』や元雜劇など『三國演義』成立の際の材料となつたものとの對照で考えることが必要であると思ふし、黄鈞氏の言う「外部研究」の意味もよくわからない。

晝食休憩を挟んで、午後の部。まず最初は中央電視臺のプロデューサー王扶林氏の「電視連續劇『三國演義』撮制組基本情況」。撮影中のテレビドラマ『三國演義』の制作總指揮を擔當している王氏が状況を報告。

二人目はソ連（當時）科學アカデミーゴリキー世界文學研究所首席研究員であるポリス・II・リフチン氏の「漢

族及西南少數民族傳説的諸葛亮南征」。雲南など中國西南地方の少數民族の傳説に見られる諸葛亮南征故事を紹介。漢族以外の少數民族の傳説や演劇の中の三國故事を研究するべきであるとした。

續いてフランス國立研究センター高級研究員のクロード・イヌ・サルモン女史の「三國文化在東南亞」。東南アジアの宗教・文化に「三國」がどのように根付いているかを探る。まずは關羽信仰。商賣の神である關羽は東南アジアに移住した華僑の間でも信仰され、十九世紀から各地に關羽を祀つた廟ができた。ただ、例えばジャカルタの南靖廟は福建南靖の出身者が建て、メダン、マカッサルの關帝廟は廣東、メダンの武帝廟は福建というように、廟を建てた目的は同郷商人の結束を固め、その郷土會的組織の本部として使うためであつたようで、そのグループの守護神として關羽を祀つたということらしい。次に『三國演義』の翻譯は、十九世紀後半から數種のマレー語譯、ジャワ語譯が出版され、すでに原語で讀むのが困難になつていた二世華僑に歡迎された。また、多くの寺の壁に三國故事が描かれてい

たこと、「三國」の登場人物を織り込んだ詩が多く詠まれていたこと、さらに「古城會館」という組織があり、「三國」の「古城聚會」の故事にちなんで劉・關・張・趙の姓の人々によって構成され、東南アジアはもちろん世界各地に支部があることなど、中國人華僑の間で『三國演義』が

人口に膾炙しており、彼らの思想にも影響を與えてきたことが考えられる。そしてその影響は華僑のみにとどまらず、多くのマレー人、インドネシア人にまで及んでいた、という内容。女史が「三國」の研究をしている過程で東南アジアに目を向けたのか、東南アジアの研究を以ていて「三國」の存在に氣付いたのかは尋ねそびれたが、いずれにしても筆者にとっては予想だにできなかった種類の研究であり、今回の研討會の中では最も興味深い發表であった。

次は四川廣播電視臺文藝部編集委員の畢璽氏の「一〇〇集系列廣播連續劇『三國演義』的創作紹介」。ラジオドラマ『三國演義』の紹介。

續いて中國社會科學院歷史研究所副研究員の董超氏の「蜀漢後主劉禪評傳」。劉禪の生涯を『三國志』から紹介。

紹介

凡庸かつ軟弱な君主であり當然批判されるべきではあるが、彼のような人物を皇位につけざるをえなかった皇位繼承制度がもっとも悪いと結論する。

そして四川省社會科學院副院長で中國『三國演義』學會の副會長でもある譚洛非氏の「『三國演義』與中國傳統文化」。『三國演義』と中國の傳統文化との關係について述べ、最近の日本などの三國ブームについても言及した。

二日目は會場を成都市内の諸葛亮を祀った武侯祠に移して行なわれた。まず中國藝術研究院常務副院長の李希凡氏の「三國文化源遠流長」。三國文化の深さを述べたもの。

次に筆者上野が「『三國熱』在日本的背景」というタイトルで發表した。日本では『三國演義』の翻譯や吉川英治の小説以外に、特に若い世代はテレビの人形劇や漫畫、ファミコンゲームなどによって「三國」に接している現状を紹介し、それが最近の「三國ブーム」の一因であろうとしたもので、神戸新聞（九一年六月七日）に掲載された筆者の小論とほぼ同内容のものである。

最後に中文會會長の大町頼勝氏が中文會の活動狀況を報

告、筆者の發表に付け加えて日本における「三國」の狀況についても述べた。

中國の學會にはよくあることのようなのだが、發表をせずに提出だけされる論文がこの研討會でも數編あった。主なものも二編紹介する。まず成都武侯祠博物館研究部主任の譚良嘯氏の「諸葛亮的服飾論考」。羽扇、綸巾、鶴氅など『三國演義』の諸葛亮に特徴的な服飾の形成過程をさぐるもの。『三國志平話』には服飾の記載はほとんどなく、元雜劇には、羽扇、綸巾、鶴氅の文字は見えるものの、『孤本元明雜劇』の穿關には冠、道袍、羽扇とある。晉の『語林』に葛巾、羽扇とあるので、羅貫中はこれをよりどころとして、皇帝のつけるものであった冠を巾に、宋代の士大夫の普段着であった道袍を神祕性を加えるために鶴氅としたのであらうと推測。また、明以降の版本の挿圖で諸葛亮の服飾が一定せず、特に綸巾の大きさが様々であるのは、その出版時期の服飾の流行との關係によるものではないかと結論する。筆者が以前同様の研究をしたことがあるため特に興味深く、今回の中國側研究者による文學關係の發表、提出論

文の中では最も意欲的な研究であると感した。

それから四川省社會科學院の沈伯俊氏の「重新校理『三國演義』的幾個問題」。『三國演義』の校理出版を手掛けている沈氏がその問題點と對策を提唱するもの。小説である『三國演義』の誤り(沈氏の言う「技術性錯誤」は作者の創作意圖や藝術構想とは全く關係の無いものであり、積極的に改めるべきだとする。従つて例えば人名の文字の誤りや官職の誤り(楊阜が「少傳」に任じられるのは「少府」の誤りなど)等は校正するが、その中でもストーリー展開にかかわると思われる錯誤(曹操が史實では建安元年に司空、建安十三年に丞相になるが、『演義』では建安元年から丞相になっているなど)については校正しないという立場を明らかにしている。その上で、研究者にとっては校正をしない原文のままのものが有益であるが、一般讀者にはそれでは不便であるので、どちらにも受け入れられやすい方法として、原文を改めたものを本文とし、脚注で原文を示して改めた根據を説明するという形が最適であらうと結論している。中國の古典小説を出版する際には常にこのような問題がつきまとうのだ

ろうが、それに積極的に取り組み、その問題點をも明らかにしようとする沈氏の眞摯な姿勢には好感がもてる。

今回の研討會を總括すると、全體的には低調であつたと言わざるを得ない。今回は「三國文化研討會」であるから、歴史など多方面にわたるものであり、筆者の専門とする文學關係の發表、論文が多くなかつたために餘計にそう感じたのかも知れないが、見るべきものは少なくなつたように思う。ただ文學についてはこの研討會の一週間ほど前に、湖北省江陵縣で「第七屆『三國演義』學術討論會」が行われており、そちらには中國の『三國演義』研究者の主要なメンバーは顔を揃えていたようであるが、國內學會であるため國外の研究者には開放されなかつた（但し、上田望氏は特別参加）。もちろん兩方に参加した研究者もいたけれども數は少なかつたようだ。

研究傾向についてだが、サルモン女史の中國國內だけでなく國外にまで視野を広げた研究のような、スケールの大きな研究が必要な時期に來ていると思われるのだが、中國研究者の多くにはそのような姿勢はあまり感じられなかつ

た。中國という國の現状を考えれば、研究活動の方法も限られて來るのは止むを得ないかもしれない。しかし以前よりは少なくなつてきたようだが、『三國演義』だけをいじくつたような、極論すれば感想文的な發表、論文がまだまだ見られる。今回のような國際學會開催の目的の一つには、各國の研究の一端を知ることによって、これまでになく様々なアプローチの仕方を開拓することがあると思われるが、一部の中國側關係者に外國人に何がわかるか、といったような態度が窺われたことは非常に残念である。もちろん外國の研究が全て優れているわけではないし、中國國內でも畫期的な研究が行われているだろうけれども、今回筆者はサルモン女史のような研究があることに非常に感動を覺えたので、特にその點を痛感した次第である。また日本では最近『三國演義』の版本の優れた研究が進んでいるが、中國ではあまり行われていない。その點を中國の研究者に尋ねてみると、「中國では日本ほど多くの版本を見るのは不可能だ。」とのことであつた。それはその通りではあるうが、それならばもっと日本での研究の成果を利用してよ

いように思う。日本と中國の研究交流の少なさを痛感し、今後活發に交流が進むことを期待するが、それには日中双方のより一層の努力が必要であろう。

もう一つ氣付いた點で少なからず驚かされたのは、日本で『三國志』が企業經營に生かされている、ということが中國の研究者の間で常識となつてゐるらしいことである。發表の中でも繆鉞氏と譚洛非氏がそのことに言及し、譚洛非氏には『三國演義・謀略・領導藝術』、研討會の参加者で海南大學學報主編の霍雨佳氏には『三國演義與現代商戰』という本もある。日本では確かにそのような本も出版されているし、一部の雑誌では毎週のようにそのような類いの記事が掲載されている。本當に企業經營に生かしている人が日本にいるのかどうかは甚だ疑問だが、そういった状況が以前中國の新聞で紹介され、それ以降中國でもこの種の本が出版されるようになったようだ。別にそれが悪いとは言わないが、少なくとも文學研究とは呼べないと言者は認識しており、その種の記事も本もほとんど目を通したことがない。しかし、中國の研究者は文學研究をその他の分野

にも活用する絶好の例だと考へてゐるのか、多數の人が興味を持つてゐるようであつた。日本の學術的な研究には餘り興味を示さないのに、なぜこの程度のことにも色めき立つのか、どうにも理解し難い。

研討會の内容について報告してきたが、レジューメの有無、發表の内容に對する筆者の興味の度合によつて、紹介の仕方に差が生じる結果となつてしまつた。また、筆者自身の發表があまり研究と呼べるものではなかつたにもかかわらず、いろいろと批判をしたことは厚顔無恥の極みである。研討會の運営に盡力された關係者の方々には、この場を借りて御禮と御詫びを申し上げたい。なおこの「中國四川國際三國文化研討會」については、上田望氏が「三國文化研究の展望」(『中國圖書』九二年・二月號)と題して「『三國演義』學術討論會」と併せて報告し、横堀克己氏が朝日新聞紙上(九一年十二月十日)に記事を掲載してゐる。また今回の發表論文、提出論文をまとめて出版する豫定であると聞いているが、出版時期は未定のものである。

ここからは中國における最近の『三國演義』研究の動向について述べる。個々の研究の傾向については、先に述べた状況とそう大きく變化してはいないであろうから、最近出版された研究書、及び中國で開かれた、あるいは開かれる豫定の學術會議について紹介することとする。ただ、研究書、研究論文については、中國には『三國演義辭典』（沈伯俊・譚良嘯編 巴蜀書社 八九年六月・改訂版 九一年七月）、日本には『三國志演義』研究文獻目錄稿（中川謙・上田望編 『中國古典小説研究動態』第四號 九〇年十月）と「同・訂補」（第五號 九一年十月）があり、ほぼ完璧に網羅しているものと思われるので、ごく最近に出版されたものにとどめる。

研究動向については四川省社會科學院の沈伯俊氏に書面で御教示頂いた。これから先は筆者のまとめたものというより、ほとんど沈伯俊氏のまとめたものであると言ってもよい。中國『三國演義』學會の祕書長でもある沈伯俊氏は、今回の研討會でも運営の實質的な中心であり、筆者も大変お世話になった。先に挙げた『三國演義辭典』をはじめ、研究書、研究論文は多數に及び、これも研討會の論文の項

紹介

で述べたように最近は『三國演義』校理も手掛けている。現在の中國の『三國演義』研究者の中では最も意欲的な研究を行なっている一人である。

まず、版本の整理出版状況。次に挙げる三つは全て沈伯俊氏が校正整理したものである。

1 『三國演義』校理本』（通行本、附注）

江蘇古籍出版社、九二年二月。末尾に「校理一覽表」を附し、八百二十五箇所を指摘。

2 『毛本』《三國演義》整理本』

中州古籍出版社、九二年八月。九百箇所あまりの誤りを校正。毛宗崗の評も残す。

3 『嘉靖本』《三國志通俗演義》整理本』

近日出版予定。大量の誤りを校正。注釋の數約二千。

次に研究書。最近の研究書の中から文學研究とは言い難いものを省き、重要なもののみを沈伯俊氏に選んで頂いた。

1 『諸葛亮形象史研究』陳翔華著。

浙江古籍出版社、九〇年十二月。上編で諸葛亮の藝術形象の形成と演變、下編で諸葛亮故事の流傳と影響について

述べる。

2 『三國演義』考評』周兆新著。

北京大學出版社、九〇年十二月。「說三分」も『三國演義』成立の重要な要素であり、『演義』は羅貫中個人の創作と考えてはいけないこと、『演義』は嚴密な意味での歴史小説とは言えず、その創作方法は浪漫主義に近いこと、嘉靖本が羅貫中の原作に最も近いものとはいえないこと、などを述べる。

3 『三國演義』美學價值』霍雨佳著。

中州古籍出版社、九一年五月。『三國演義』の審美價值、藝術の開拓と創造、人物の歴史と虚構、毛宗崗の美學思想について述べる。

4 『三國演義』與中國文化』論文集。

巴蜀書社、九一年九月。『三國演義』與中國文化學術討論會（第六屆『三國演義』學術討論會）の發表論文、提出論文をまとめたもの。

5 『三國演義』藝術欣賞』鄭鐵生著。

中國國際廣播出版社、九二年七月。未見のため内容未詳。

そして學術會議の狀況。今回の討論會以外に、これまで中國で行われた『三國演義』關係の全國規模の學會を全て挙げる。

1 『三國演義』學術討論會』

首屆 地點―成都 八三年四月十五日から二十一日

四川省社會科學院主催

第二屆 地點―洛陽 八四年四月十二日から十九日

河南省社會科學院文學研究所・河南省文學學會

共催

第三屆 地點―鎮江 八五年十月二十二日から二十六日

中國『三國演義』學會・江蘇省社會科學院・江

蘇省哲學社會科學學會聯合會・江蘇省文聯・南

京師範大學・鎮江市人民政府共催

第四屆 地點―襄樊 八七年十月二十六日から三十日

中國『三國演義』學會・湖北大學・襄樊大學共

催

第五屆 地點―海口 八八年五月十九日から二十四日

中國『三國演義』學會・海南大學・海南師範學

院共催

中國『三國演義』學會主催

第六屆 (『三國演義』與中國文化學術討論會)

地點—綿陽 九十年九月十日から十四日

中國『三國演義』學會・政協四川省綿陽市委員會・四川省社會科學院・四川省社會科學會聯合會共催

最後に九三年開催豫定の學術會議について。「第八屆『三國演義』學術討論會」が春(日時未詳)に河南省許昌市で開催。参加者約百名の見込み。また「孫吳與三國文化研討會」が五月上旬に浙江省富陽縣で開催。参加者四十名程度。文學研究者だけでなく歴史研究者も参加すること。

第七屆 地點—江陵 九一年十月二十一日から二十五日

中國『三國演義』學會・湖北省『三國演義』學會・江陵縣人民政府・湖北大學中國古代小說戲曲研究所共催

現在の中國の出版狀況を考えれば、三國關係の書籍はかなり多く出されており、中國國內でも一種の三國ブームが起こっていると言えるかも知れない。しかし純粹な研究書の數は決して多くなく、必ずしも良い狀況とは言えないと思われる。先にも述べたように、新しい研究方法にも積極的に目を向け、優れたものは謙虚に受け入れる姿勢を持つて欲しいこと、そして研究方法を強制的に押し付けられるような時代が再び來ないことを願ってやまない。

2 「三國與諸葛亮國際學術討論會」

地點—成都 八五年十一月二十四日から二十九日

3 「傳統文化與現代管理研討會」

地點—廣州 八六年十二月四日から七日

中國『三國演義』學會主催

本稿の執筆にあたっては沈伯俊氏、上田望氏に御教示、御協力を頂いた。改めてここに謝意を表したい。

4 「『三國演義』版本討論會」

地點—昆明 八七年一月十二日から十五日

(富山大學 上野隆三)